狩野直喜著「中國哲學史」を讀む

宮崎市定

はじめに紹介者の、本書の著者、故狩野君山博士についての個人的な憶い出を語ることを許されたい。私が京都大學に入學したのは大正十一年であり、博士の講席に列したのは二回生になってからである。それも本書の原稿となった普通講義には出たことがなく、特殊講義と演習を傍聽した。特殊講義は最初一年半に亘って「清朝の文學と制度」が講ぜられ、主に科擧の話で、これは大變面白かった。拙著「科擧」はこの講義に負う所が多く、特に儒林外史を引用した所などは講義のままである。科擧の次は兩漢學術考であったが、之は途中までしか聽けなかった。外に元曲選の講讀があり、之も仲々面白かった。「風光好」などという艶っぽいものもあったが、肝心な所は苦笑いをして解釋されなかった。演習には作詩文があって、日本文の翻譯を課せられ、恐る恐る迷譯を提出したこともあったが、その度に朱筆で眞赤に直して評語を附して返して貰った。野雁が群をなす、という所を爲群と書いたら、成群と直された。成る程と感心したが、さて其後漢文を讀んでいると、屢〻爲群という使い方に出遇うので、また分らなくなり、つい近頃までその解を得なかった。ところが此程梁書王規傳を讀んで、非爲功難、成功難也、という文句にぶっかって、やっとその違いが分ったような氣がする次第である。その他大學院の演習、儀禮疏の講讀にも出たことがあった。この演習の輪讀者は倉石武四郎、崎山宗秀、中野長右衞門諸氏の顔觸れで、几をどう持ってきて、何處へ据えるとか云う細かい議論で、博士は屢〻胡竹村を引用された。ただ一つ、疏の中に孔子不見仕諸侯、という句があって問題になったが、聞いていながら、不見を覓と讀んだら意味が通ずるだろうにと考えてみたことがある。併しうっかり口を出して、お前も讀めと云われると叶わぬから默っていた。私が方面違いの元曲や注疏に今もって多少なりと親しみを感ずることができるのは、全く先生の講義の賜だと感謝している。

さて博士の遺著、中國哲學史は著者が京都大學において、明治三十九年から大正十三年に至る間に哲學科普通講義として支那哲學史概說を敎回繰り返して講じたものを、一部は著者の草稿にもとづき他は學生のノートによって整理編集し直したものである。本文六五九頁、第一編總論を除いて他は時代順に、孔子以前の中國思想、春秋戰國時代、漢唐時代、宋元明代、清代の五編・五時期に分っている。各時期の頁數は概ね百數十頁で、蓋し甚だ均衡を得たものと言うことができよう。というのは、從來の類書はともすれば古代が詳細を極めるに反し時代が下るに從って簡單となり、普通の史と名の

つくものとは正反對に、恰も三角形を倒に立てたような頭部肥大症に陷っているものが多かったからである。この叙述の分量が均衡を保っている點が先ず本書の第一の特色に擧げられよう。

各時代には先ず概説として、その時代の特色、傾向を述べ、次に各論として列傳體に夫々の思想家の學説の大要を述べる。或いは時代により、或いは地方により、或いは學風によって數個のグループに細分する場合もある。記述の下限は康有爲に止まり、章炳麟以下には及ばない。卷末に人名書名の索引を附し、別に吉川幸次郎氏の簡單な序と跋とがある。以上が本書の體裁のあらましである。

さて本書は題名には書きこんでないが、その成立の經過が示すように、中國哲學史の概説である。但し普通の概説書とは大いに異る。というのは、普通に概説書といえば單に纏めたにすぎぬものと解されているらしいからである。概説は論文と違って、孫引きが自由であり、極端に言えば論語を一度も讀まなくても孔子の思想が語られ單に著者一個の見識で綴り合わされてよいものと考えられ勝ちではなかろうか。斯く申す私の書いたらしいものでも、時には意味を取違えて引用されたのに出遇って面喰う場合がある。ところが本書はそんなものではない。博士は嘗て私に、誰でも知っていることを言い變えるのは學問ではない、と戒められたことがある。この言葉には實は出典があった。それは日知錄の序にあり、本書にも引かれた次の顧炎武の言葉である。

炎武は或る人に書を與えて云う、今の人が纂輯する書は、正に今の人が錢を鑄るが如きものである。古人が錢を鑄るときは、銅を山より采って用いたのであるが、今の人は舊錢を買って廢銅と稱し、改鑄するだけのことである。此れでは、出來た錢も粗惡であり、且つ又、古人の傳世の寶を碎いて了うので、兩損である。しかし自分が此の書(日知錄)を著わすには、早夜誦讀し反復尋究して、一歲の間僅かに十餘條に過ぎない。しかしながら、此は山から采り來った銅たること間違いなし、と。(五一四頁)

博士の中國哲學史の講義は、正しく顧炎武の言う、山より采り來った銅であったのである。故に本書は概説書であって、本書を讀めば一通り以上の中國哲學史の智識が得られるが、更に一歩進んで中國哲學を勉强し、原典を讀もうという人のための此上ないよい手引きになる。この點がいわゆる概説書と違って特に有難い點である。

本書はその第一編總論において、中國哲學史の範圍及びその特質、中國哲學史の研究法という二章を設けて著者の立場を明かにしている。之によれば中國哲學史はいわゆる支那學の一面として研究しなければならず、中國なる特殊の文明を理解する一手段である。この中、支那學なるべしとは、哲學、史學、文學という風に各自を分離せしめてはならぬ、という意味である。而して中國思想の特長は古典の成立以來、古典の研究という形で發展してきたので、中國哲學史は云いかえれば古典研究の歷史ということができる。時代的、或いは學派的な學説の變化乃至相異は經書に對する態度の相違から生ずる。而して研究の態度は大別して傳經派、即ち經典の本文研究に主力を注ぐものと、傳道派、即ち經典に含まれたる教義の闡明に努力するものとの二派に分っことができる。漢唐の訓詁學、清代の考證學は前者に屬し、宋元明の理學・心學は後者に屬する。中國の學者は概ねこの何れかに屬し、互いに相排擯するが、哲學史は歷史で

ある以上、何れにも長短所のあることなれば、一方に偏倚してはならぬ、というのである。されば本書には、最初の總論中において、既に論語の本文、爲仁之本の句につき、漢・宋の學によって讀み方に差違あることを指摘し、その他至る所に經書の解釋が學派によって異る點を說明してくれる。これは著者のような碩學にして始めて出來ることであり、本書のもつ大きな特色である。

著者が傳經派と傳道派を兼學せねばならぬと言い、これ迄和漢共に、兩者を均等にやった著が少い、と言ってその困難さを指摘するのは同時に、著者自身の理想と抱負を述べているのであるが、若しここに蔭の鑿があって、著者の立場を更に第三者の側から說明するならば、なお若干の注釋を附加することが可能である。それは著者の立場は疑いもなく、淸朝の考證學の立場、卽ち漢學であるということである。但しこれは實は當然なことであって、若しそうでなければをかしい程なのである。

漢唐の訓詁學も宋明の理學・心學も、さては淸朝の考證學も、何れも經書を最も正しく讀み取ろうとした意圖に變りはない。その正しくという意味が、結局考證學派の言うような、文獻學的、言語學的に正しくという意味に落ちついたので、著者ならずとも、この主張には贊成せざるを得ない。但し考證學と云っても、哲學史を述べる時の著者の立場は、考證經學の立場ではなくて、むしろ考證史學の立場であることを注意する必要があろう。

哲學史は哲學ではない、というのが著者の信條であると思われる。哲學には個人の自己の主張がなければならぬが、哲學史はむしろ歷史であって、只あるが儘を認めなければならぬ。もし自己に主張があっても、それを背後に退けて、あるがままの思想を、あるがままの體系に整えるべきであり、自己の思想を以て讀み、自己の思想で手を加えてはならぬのである。ところが中國においては、考證學も一つの學派であり、極端に言えば、絕えず攻めたり攻められたりする敵をもっている。それは單なる智識的な學問ではなく、感情的な色彩をもっていて、漢學派は宋明の學を口に上すのも厭しとしない。本書は斯る弊に陷ってはならぬとし、宋學も心學も既に存在し、思想史的に重要な役割を占めたものである以上、之を無視してはならず、それ等の人々の著述をも均しく利用せねばならぬ、としている。

此に、均しく利用するというのは、無差別に、等價値に取扱うという意味でなく、只研究の題目として取上げるという意味なることは明かである。考證學が文獻を、何よりも先ず言語學的に正確に讀むことを第一條件とする以上、訓詁考證の上では、宋學は漢學に敗けるのである。著者が學說の相違としてあげた例は、概ねそういう結果になっている。併し之は著者の意見で宋學を敗けさせたのではなく、敗けたという事實が既にあったのである。著者の立場は飽迄も客觀的な史學の立場を守っていると云える。

この立場は西洋のいわゆる支那學者のそれに近い。事實著者は西洋學者の所說を、たとえそれが甚しく賴りないものであっても、他山の石として利用することを怠らなかった。また我が國の學者では荻生徂徠、伊藤仁齋が屢々引用され、索引によれば前者は實に十五回、後者は十三回に及んでいる。これほど頻繁に引合いに出された學者は中國人には全くない。これは著者が我國の先學の功績を顯章

しょうとする好意からでもあるが、また日本の學者は、たとえ學派的な色彩をもっていたとしても、その中國の事物を見る目が第三者的な冷靜さをもち、少くもある距離をおいて觀察しているので、そういう態度に共鳴された點もあったかと思われる。

具體的な內容に立入っての紹介は、質の點から云っても量の點から云っても私の手にあまる。ただ私にとって最も有益だと思われたのは最後の淸の學術と思想の編である。我々專門外の者にとって、明代までは、日本にも夫々の研究があり、それを手引きとすればある程度まで中國の書物も利用し得る。ところが肝心の淸代になると全く手に負えなくなる。いったいに舊時の中國の書物には、滅多に著者の立場や、學問の系統が解說されていない。何のために、どういう意向で著わされたかもことわってない。其上に淸朝の考證學者の文章がまた難解である。然るに本書は努めて學問の系譜と、そのよって來る所を說明し、相互の立場の相違する點を明瞭に解明して餘蘊がない。從來、淸一代を概觀したものとしては、梁啓超の淸代學術概論ぐらいを賴りにする外なかったのであるが、いま本書によって多年の渴望を癒されたわけである。

本書の底稿となった博士の哲學史講義が大正十三年で打切りになっていると云えば、それは今から三十餘年の昔である。扨この三十年間に支那哲學の研究はどれだけ進步したであろうか。專門外の筆者の寡聞を以てするも、部分的には色々な勞作が世に出ている。之によって本書の記述が改めらるべく、少くも改めてよいと思われる部分も少くないであろう。例えば五行思想は矢張り戰國に入ってからの產物とする方が落付きがよく、老子道德經の思想も、儒敎が成立してから後の反動として生れたものと見る方が、より妥當なるを覺ゆる。また中國の古代史自體が、殷墟發掘や新史料の出土によって著しい進展を見せ、思想史をも含めて、全般的に再檢討の機に直面していることも事實である。併し之を全般に亘る通史として見る時、本書の價値はさして動搖しないであろう。いかに優れた部分をよせ集めて見てもそれですぐ、優れた通史にはなり得ない。やはり全體を貫いた態度が必要になってくる。本書の一部分に相當するある時代、特に宋明の思想史は、或いは容易に書き換えられるように思われるかも知れない。併し小さな谷は深いように見えて實は淺く、大きな谷は淺いように見えて實は深いものである。全時代を通じて、本書に勝る新しい哲學史は容易なことでは書き得られまいと思う。

本書の著者の立場は、考證史學の立場であることを前に述べた。考證學の信條は、徵なきものは信ぜず、ということである。この證據とは直接の證據を意味するらしい。その上に孤證は取らず、とか色々やかましい規則がある。こういう家法の嚴なる點に考證學の大きな强味があると共に、また自然にそこから制約を受けることを免れない。本書は考證史學の立場においてする限り、部分的には改作することはあり得ても、全體の體系を覆えすほどの新研究は望み得まいと思われるほど、堅固不動に出來ている。併し將來の概說がこの方向をそのまま推進しただけでよいかというと問題がある。そしてその問題は、哲學史をも含めた歷史というものの在り方の問題と關聯してくる。

歷史學は、云うまでもないことながら、從來のランケ風の客觀史

學が、唯物史觀によって全々書き換えられないまでも、大きな試錬の前に立たされている。これは起るべきものが起ったので、たしかに歷史學の大きな前進である。併し一口に唯物史觀と云っても、これがそれだと言って取り出せるような神器みたいな物はない筈である。教祖を立て經典を定めて見たところで、後世になれば解釋の相違から、色々な分派が分れてくることは、何よりもよく本書が教えてくれる。唯物史觀は何であれ、此等によって提起された問題に對しては、歷史家は目をつぶるわけにゆかぬ。從って各人が各樣に理解して、必要なところを取入れる外はない。もちろん、之では唯物史觀ではない。本當の唯物史觀になるためにはすぐに鬪爭を實踐しなければなるまい。（本書の著者がある時マルキシズムの說をきいて、それは陽明學だ、と言われたそうである。もちろん本書にはそんなことは書いてない。）

ところで歷史學の任務は何と云っても、歷史を叙述するにある。どんな立派な史觀があっても、それが立派な叙述にならなければ何にもならない。近頃は動もすれば、新しい立場にさえ立てば、すぐ立派な勞作ができるように思われ勝ちだが、笑うべき謬見である。立派な叙述というのは、文章がよいと云うよりも、確かな根底に立ったもの、唯物史觀がともすれば蔑視し勝ちな客觀史學からの批判にも十分堪えうるような、堅固な構造をもったものでなければならぬであろう。學問は新しさを賣物にする流行の着物ではない。どんなに立場が違っても良心的なものは有益である。粗末な鐵筋コンクリートよりも、良心的な煉瓦造りの方がずっと耐久力がある。

ところでいわゆる新しい哲學史が、若しも歷史學の階級の發達史を借りて來て、各時代の支配階級の理念が、そのまま上部構造たる哲學に現われている、というようなことで滿足するならば、それは私にとって詰らない哲學史である。歷史學は證明問題ではないからである。

もしも私に將來あるべき哲學史の映像を空想せよと云われれば、次のような注文をしたい。思想というものが、大きな社會の變動に從って變化することは私も認める。併しそれは、社會構造がすぐ思想の上に反映するというような簡單なものでなく、社會の進歩と共に思考力と、之に伴って表現力も增してくる。思想は結局、作者と受容者との合作であること、文學や美術と擇ぶ所はない。この兩者の協力で哲學も前進する。從來はある程度の思考で滿足していたものが、次の時代になるとその程度では最早や滿足できなくなって新しいものを求めるのである。本書にも云う。

一体、經典の文というものが近世の文と違い、非常に簡潔に出來て居る。或る場合には、あまりに簡潔に出來て居る爲に、一の文章について色色違った解釋を爲すことがある（八頁）。

この一文は甚だ意味深い。思うに簡潔は簡潔を期待して故意にしたのでなく、それ以外に表現の仕方がなかったのではあるまいか。私は將來の研究をこの方向へもっと推進して貰いたいと思う。思想史は前の思想と後の思想との間に、一連の連鎖反應のような關係が存在することを前提として始めて成立する。もしも鎖が途切れている時は、新しい環を發見し、發見できない時は臨時に假說の環で間に合わすことも許さるべきである。とも角もしてみて、この連鎖反應の起り方を說明し、進んでは全く新しい連鎖を發見して貰いたい

と思うのである。思想史を含めた文化史は、經濟史や社會史と密接不可分の關係を有するが、さりとて經濟組織・社會機構で思想を割り切って說明しようという、近時の議論には私は反對である。何となれば、哲學・文學と名前をつけた瞬間から各自は一應獨自に考察すべき連鎖反應の個有の領域をもつことになったわけで、互いにその存在を尊重せねばならぬと考えるからである。と云って何も同一人が兩方をやってはならぬという意味でもなく、兩者の關連を否定するのでもない。寧ろそうすることこそ望ましいのである。ただもし哲學史を哲學的思考以外のもので說明するならば、それは課題の回避だと信ずる。

この歷史現象としての連鎖反應は、個人を單位とすることも可能であるが、時代を單位とすることも考え得られる。少くも時代を荷うものとして、個人を取扱うことが可能であろう。この爲には或いは列傳體の哲學史を解體する必要が起るかも知れない。もしもこの點について一つの行き方を空想するならば、こんな例も考えられる。いったい人類の智識がある程度まで發達すると、これを綜合してみようという試みが何時かは起ってくる。易は一つの綜合であり、呂氏春秋や史記や淮南子も綜合の書であり、周禮もまた綜合の書と云える。もちろんその綜合の仕方が夫々異っているが、どうもこの間に一連の連鎖反應がありそうであり、殊に禮を以て綜合しょうとした周禮が問題である。こういう考がどうして起ったかを究めたならば、その性質も自然に明かになってくるのではあるまいか。もちろん以上述べたような行き方は既に考證史學の立場を遙かに逸脫したものになっている。そしてこういう要望が滿される爲には、餘程しっかり勉强して貰わねばならぬ。實現は恐らく遙かに遠い將來のことに屬するであろう。

本書は講義が底稿となったため、若しも著者が自ら筆を取って書いたならば、恐らく省略されたであろうと思われる插話が所々に散見する。兪曲園や毛奇齡の迭話の如きは特に面白い。更に讀者は本書の文字に書かれたもの以外に、本書から多くの敎訓を受けることであろう。それは一口に云えば、山から銅を掘り出す努力である。もちろん、著者が兪曲園を論ずるために、春在堂全書五百卷を全部に目を通されたかは敢て保證しない。それは嘗て著者が、更に年長の老儒から、近時の若い人の讀書力には敬服すると云って、恰も引用書が悉く讀破されたことを信ずるような口振りに、反って驚いたという話をされたことがあるからである。それにも拘わらず、上は經書諸子から、漢唐の註疏、宋明の諸儒、下っては淸朝の考證諸派に至るまで、更には西洋支那學者の著述まで一〻目を通して、その要點を確實に把握されたことは驚歎に値する。そして山から銅を掘り出す困難さは、やはり山から銅を掘ろうと志す者によく分る。とかく廢銅で造った著述の多い世の中に、これこそは山から掘った新銅いな精金で造られた賞盃だと云って推奬できるものである。

本書の紹介は、はじめ著者の敎を受けた專門の大家にして貰う筈であったが、誰も恐れをなして手を出そうとしない。遂に順番が專門外の私の所へ廻ってきたのである。若しも私の紹介の仕方が惡かったならば、その責任の一半は、回避された諸家も負うべきものであると潛かに考える次第である。（昭和二十八年十二月　岩波書店　A5版　六五九頁　一〇〇〇圓）